日本ブルーノ・ワルター協会会報　第5号

1973年5月

〒186

[redacted]

編集発行人　菅　一

キャスリーン・フェリアーへの告別の辞

ブルーノ・ワルター

私がキャスリーン・フェリアーに最後に逢ったのは、一九五二年の五月であった。彼女は、ウィーンの大楽友協会ホールに於けるウィーン・フィル・コンサートで、マーラーの「大地の歌」を私の指揮の下で唱った。その翌日から、同じ場所で、その曲の録音が、ロンドン・デッカ社に依って行われ、その後、一緒に飛行機でウィーンを離れたのであった。私が最後に聴いた彼女の歌う歌詞と曲は、マーラーのその作品の最後の部分、「告別」であった。彼女は、美と生命力に満ち満ちた姿で、私の側に立っていた。そうして、私は彼女が唱う「告別」の歌に、不吉なものを感じ取って居た事を、今でも記憶して居るのである。と言うのは、時間がかかり、而も骨の折れる録音セッション中に、疲れも見せずに成し遂げた瑞々しい歌いぶりのみならず、彼女は表現力と熱意と熱烈な献身を示したのだが、声と情感の面で、窮極点に立った事を暗示するものがあったからなのだ。そうしてまた、彼女の眼の中には異様な輝きがあった。それが、マーラーの作品の理想的な表現に於ける彼女の歌唱そのものを、強く心に訴える彼女自身のメッセージにして了ったのであった。それ以来、マーラーの大地の歌の事を考えると、必ず私の目にはキャスリーン・フェリアーの姿が見え、私の耳には較べるものがない彼女の美しい声の響きが聞え、私の心には彼女の感情表現の中にある崇高な変容が描き出されるのである。彼女と此の告別の交響曲とは、（最後の歌だけではなく、作品全体が告別の意味を持っているのだから）、私にとっては永久に同一なのである。

※　※　※　※　※

此処に現われている運命の悲劇は、何と良く似通っているのだろう!! マーラーは、死の影の下で「大地の歌」の作曲を思い立ち、作曲し、またキャスリーン・フェリアーは、ウィーンで唱ったあの時、同じ暗い領域に近づきつつあったのである。終曲で彼の魂が翼を拡げて高く舞い上り、うつろい易い〝最愛の大地〟を迎える迄、此の作品の他の諸歌曲に於いて、マーラーはシナの詩人の詞をかりて、悲嘆と歓喜に、また現実生活への絶望と愛に、別れを告げるのである。あの時の演奏に於けるキャスリーンの感情表現は、作曲者の意図の理想的な実現以上の無限のものであった。彼女の魂の全ての和弦は、同質の魂から生じるあのメッセージの崇高なハーモニーを伴って、幾度も幾度も鳴響き、そうして彼女が唱った歌は、多分無意識であっただろうが、彼女自身の告別と成ったのである。

私のキャスリーン・フェリアーとの交際は、一九四六年にロンドンで始った。其処で、私は一九四七年の第一回エディンバラ音楽祭の為の私のプログラム編成をルドルフ・ビングと討議して居た。私は、マーラーの「大地の歌」を演奏したい希望を述べ、此の作品の独特の要求を満す為の発声と感情表現を、充分に果す能力を持った歌手を、特にアルトのパートを唱う歌手を見つける事が困難である事を力説した時に、ビングはこう言った。「皆が激賞して居る若い歌手が一人居ます。貴方の為に唱う様に頼んでみましょう。多分、彼女には貴方が求めておいでになる資質があるでしょう。」

それで私は、私の友人宅で彼女に逢う事に成った。私は、今でも其の時の事をはっきりと記憶している!! 彼女が入って来た。内気ではないが、厚かましくはなく、適度の自信に満ちている。服装は「ダーンドル」と呼ばれるザルツブルク風の衣裳。若々しく、可愛らしい。清純で真面目な態度。気取りが無くて上品な物腰。部屋の中は、彼女の魅力ですっかり明るくなった様に見えたのである。

私は、ブラームスと、確かシューベルトの歌曲を唱う様に頼んだのである。また、其の後で、彼女としてはまだ知らなかった「大地の歌」の歌詞を幾つか試しに唱う事も頼んだのである。音楽家に生れついていた彼女は、やすやすとこの難問題を克服し、私は、私達の時代の大声楽家と成るべき歌手が此処に居るのだという事を知って歓喜したのであった。類い稀な美声、自然な発声、感情表現の真の暖かさ、生れつきの楽句の理解力。そういう特性が、彼女の人格なのであった。

此の時から、彼女との音楽上の交際が始まり、其のお蔭で、音楽家としての私の生涯の中で、その後幾つかの、此の上無く幸福な体験に恵まれる様に成ったのである。再会する度に、私には彼女がめきめきと成長を重ねて、円熟度を増し、ますます彼女の素晴しい天賦の才能の支配力を身につけてゆくのが判った。つまり、蕾が満開に向って次第に開いて行くのであった。と同時に、稀にしか協演の機会が無かったにも不拘、私達の関係は「友情」へと深まったのであった。けれども、其の稀な機会に就いての記憶は、深く私の心に刻み込まれて、消す事は出来ないのではあるけれども、悲しい事には限界があり、其の為にキャスリーン・フェリアーに就いて話をしようと企ててはみたものの、特色ある人格を詳述する事に依って、十分に話を生々しいものにする事が出来ないのは残念な事である。

※　※　※　※　※

とは言うものの、お互いに逢う機会が少なかったにも不拘、私は私の生涯を通じて、ずっと彼女を知って居た様に感じているのである。と云うのは、彼女が、人格的に奥深さを持ち、又生真面目であったと同時に、全然飾り気が無く、自然であったからである。誰にでも、彼女の心を読む事が容易に出来る様に思われた。然し、彼女の歌唱のみが、彼女の豊かな精神生活をのぞかせて呉れるのだった。キャスリーンは、唱う為に生まれてきたのであって、それこそが彼女独特な自己表現方法なのであった。彼女の歌唱を聴くと云う事は、心に深く秘められた、愛情深く、而も豊かで高貴な彼女の本質を感じる事を意味したのである。彼女には、謎めいた処も無ければ、人に疑念を持たせる処も無かった。深さと明快、また豊かさと単純性の、とても秀れた結合であった。彼女の素直な心は、人間感情の豊富な多様性を直観的に理解したし、また、彼女の芸術の中に、強力な説得力を以て、其の様な人間感情を、表現する事が出来たのである。

彼女は、子供の様な可愛らしさと、貴婦人の威厳とを兼備して居た。もっと徹底したとでも言うか。恐らくもっと適切な言い方をすれば、〝田舎娘的であり、且つ尼僧的〟であった。それで、イギリ

ス民謡を唱う時には、其の歌が陽気な歌であろうと、悲しい歌であろうと、自然な、そうして本物の響きがあって、庶民の子供の様に感じられたし、また、バッハの聖マタイ受難曲や、ヘンデルの救世主の歌唱には、人を信服させるものがあり、また本物であったのである。彼女は、子供の様にふざけるのが好きだったし、全ゆる種類の無邪気な冗談を好んだ。けれども、彼女自身の芸術との関係に於いては、新人らしい謙虚さと霊感をもっていた。彼女にとって、極める事の出来ない〝荘厳の極地〟と云ったものは無く、殊に、精神的な意義を持った音楽が、彼女自身の窮極の領域だと思われたのである。

※　※　※　※　※

私は、キャスリーンとは宗教に就いて話し合った事が無かったので、バッハやヘンデルの作品の解釈に見られる、あの独特の表現の力強さというものが、深い信仰を物語るものか、それとも単に、其の様な作品の奥深い意義を彼女が直感的な芸術理解力で把握した事を物語るものであったか、それは私には判らない。けれども、これだけは私にも言える。此の種の宗教音楽を彼女が唱う時、高い才能を持った芸術家の歌唱以上のもの、作曲者の作品又は歌詞と一致した同質の解釈以上のものが、其処に聴かれたのであった。つまり、解釈能力以上の、深い源からのみ湧いてくる霊感に依って物語られたのであって、若しも彼女がもっと長い生涯を送る事を許されて居たならば、それは彼女の魂の支配力に成ったであろう事を私は確信して居るのである。

前にも述べた様に、キャスリーンの記憶はほんの少ししか残っていない。けれども、ロンドンで行った、マーラーの「大地の歌」の最初のピアノ・リハーサルの時の記憶は、今後何時迄も忘れる事は無いだろう。「告別」の最後の部分で、私達は何時も演奏を中止しなければならなかった。と言うのは、彼女は自分の感情の高まりをこらえきれず、歌を唱い続ける事が出来なくなったからである。涙はほほを伝わり落ち、どれだけ意志の力と気力を振い起しても、それを止める事は、彼女には出来なかった。暫く経ってから、感情を抑制する事が出来る様に成ったのであった。けれども〝感傷〟しか持合わせて居なかったのではない。その涙の中に物語られていたのは弱さではなく、感受性の強さと、自分とは別の偉大な人物の魂の深い理解力だったのである。

※　※　※　※　※

彼女自身の心と、魅力的な飾り気の無さと愛情に満ちた親切、その様な特徴がもう一つの記憶であろう。彼女がアメリカ楽旅中、ロスアンゼルス市であったか、又はその近郊で、コンサートを開いた事があった。残念な事には、丁度其の時、私は自分の仕事の為にニューヨークに居たのである。彼女のカリフォルニアでの滞在を出来るだけ愉快なものにしてやりたいと思って、彼女の八日間か十日間にわたる滞在中ずっと、ビヴァリー・ヒルズの私の邸に泊る様に、私と私の娘はすすめたのである。私達が帰宅したのは、彼女が出発した後だったが、其の時、私の忠実なオーストリア人の夫婦者の家事手伝人が、こう云う話をしてくれた。キャスリーンは、暇な夜には、二人を音楽室に呼んで、自分は靴を脱いでピアノの前に坐り、二人の為に弾き語りで歌を唱って呉れたと言うのである。それは彼女の心の欲求に依るものであり、また、勿論二人を喜ばせる為でもあった。そうして、此のランカシァ出身の乙女の、友情に満ちた気取りの無さと慎しみは、〝成功〟とか〝世界的名声〟とかに冒されなかったばかりか、彼女は自然性を保ち、また「社会」との関係に

於いて、自分の自己と尊厳性を確保して居たのである。

※　※　※　※　※

そういう訳で、芸術面でも生活面でも、彼女は素晴しいお手本であった。彼女の歌唱を聴いた人、或いは直接に逢った事のある人は、誰でも心が豊かになり、高められるのを感じるのであった。彼女の崇高な芸術により、また愛情に満ちた天性によって、人々に幸福を与えたばかりか、人々からも幸福を分ち与えられたのである。それ故に、彼女が受けた厳しい苦痛と、彼女の急逝を嘆き悲しむ為に、葬送の歌が詠唱されるという事は無いであろう。彼女自身、〝長調〟で自分が人々の記憶の中に生き、また人々が自分の思い出を話合う事を望んで居る事が、私には判るのである。

彼女の晩年に、私は再会したいと思って全ゆる努力を尽したにも不拘、機会は訪れなかった。私には、友情と愛情を籠めて手紙を送る事と、友人達を通じて、彼女の愛情の籠った返答をもらう事しか出来なかったのである。私達は、既にチューリッヒの空港で、お互いに「さようなら」を言ったのであった。そうして、私は飛行機から離れ、其の飛行機は彼女をロンドンへ連れて行って了ったのだ。これから後も、私は何時も私の前に立って居た彼女の姿、真の勇気と沈着の象徴を、瞼に浮べる事だろう。それからまた、私達が別れる時に、何時も彼女が言ってくれた言葉、「貴方の上に神の御恵あらん事を」を、彼女が口にするのが、何時迄も、また何時でも、私の耳には聞えて来る事だろう。私に残された生涯を通じて、私は此の言葉を彼女に返してあげる事だろう。そうして、此の願いを籠めて彼女の事を思い起す事だろう。ー「キャスリーン。貴方の上に神の御恵あらん事を!!」。

（資料提供者・協会会員　[redacted]吉氏）

ブルーノ・ワルター

ドナルド・ブルック

カトリック風な味わいを持ち、知的でありながら衒学的ではなく情緒的でありながら感傷的ではない指揮者、ブルーノ・ワルターと比較する事の出来る、ドイツ音楽の解釈者は、此の音楽の世界には僅かしか居ない。彼の思慮深い性格、音楽や、現代の生活と其の問題に対する彼の態度を理解しようとする人は、彼の素晴しい自叙伝「主題と変奏」を読むべきである。何故ならば、芸術に於ける誠実さの持つ重要性を認識している人達の興味を呼起さないではおかない様な筆致で、数多い喜びと悲しみに満ちた彼の波瀾万丈の生涯を、彼が書綴って居るからである。けれども、自分自身では語ろうとはしない此の名高い指揮者の業績には、論ずべきものがあるのである。だから、此の章は、単に彼の自叙伝の中で繰拡げられた物語の抜書きではないのである。

一流の指揮者の真価に関する意見は、必然的に極めて多様でなければならない。然し、大多数の批評家は、ワルターのベートーヴェン、ワーグナー、モーツアルト、シューベルト、シューマンの解釈に関して、ブルーノ・ワルターはトスカニーニに匹敵し、其の事自体大変な事だと考えているのである。彼のブラームスは、典型的なドイツ風である彼の様式が、多少重々しいと感じる人々には、トスカニーニの考え方に劣ると思われている。けれども、ワルターが、ドイツ、オーストリアの先輩達が歩んだ小道を、盲目的にたどって居るとは、今は考えないでおこう。例えば、彼の「エロイカ」の解釈は申分無く個性的である。と言うのは、彼のテンポが因襲的なも

のではないからである。然し乍ら、もっと大切な事は、ドイツ人の便利屋の様に、慣例的な方法で間に合わせると云うのではなく、彼は適切な方法で此のシンフォニーを血の通ったものにするのである。（エロイカの様に、霊感に乏しい指揮者の手にかかると目茶目茶になるシンフォニーは、数多くはない。）けれども、彼の芸術に評価を下す事は、彼の経歴を手短かに概説し終る迄、控えるとしよう。

（　中　　略　）

ベートーヴェンやブラームスの偉大な作品に対する彼の解釈に就いては、既に言及した通り、伝統に導かれながら因襲に囚われない、しっかりした、また自然な態度で演奏している。〃強調を加え〃て大向うの喝采を受けようとは決してしないけれども、其の大部分をダイナミックなパッセージで作り上げるのである。

彼のモーツァルトの作品の解釈、殊に歌劇の部門では、何時も聴者を生き生きとさせる。優雅ではないが、ひからびたものではないのである。自叙伝の中で、此の作曲家の外見上は優美な陽気さの蔭に、劇作家としての仮借の無い生真面目さと豊かな性格描写とを発見する迄に数年かかったと、彼は述べている。それ以来、モーツァルトの演奏に於ける彼の課題がはっきりとして来た事を、彼は認識したのである。〃歌唱とオーケストラの音楽的な美しさがそこなわれない様にしながら、全ゆる細かい性格描写と真実性を、力強い戯曲的な表現に織込まねばならないのである。此の美の為には、強弱法とテンポとか、舞台上の表情と動作、また形態や色彩を誇張する事は決して許されないのである。それ故に、問題は美によって定められた節度の中で充分な表現を成し遂げ、美の神秘的な軽快さに、余りにも地上的な重荷を負わせない様にしながら、決然と音楽と戯曲の力で其の美を満すところにあるのである。此の一般的な問題の外に、モーツァルトは彼自身の作品の様式差異の価値を正しく認めるという特別の問題をも、彼の作品の解釈家に負わせたのである。と云うのは、どの作品にも夫々、それ自身の類型があるのである。シェークスピアの「オテロ」の表現方法は、「トロイラスとクレシダ」には適用出来ないのと同様に、「ドン・ジョヴァンニ」の様式は、決して「魔笛」の様式には応用出来ないのである。〃

ブルーノ・ワルターの名前は、「今世紀の偉大なワーグナー指揮者」の中に加えられねばならない。また彼は、グルックとウェーバーにも可成りの親近性を持っている。彼が、それ程得意としなかったのは、フランス系とロシア系の音楽である。

けれども、彼の生涯の業績の中で最も顕著な特長の一つは、マーラーとブルックナーの名曲への全世界の好楽家の愛好心を盛り上げようという決意であった。彼自身、マーラーとブルックナーの世界的大解釈家である事は疑う事が出来ない。或る不可解な理由で、此の二人を軽蔑する事が流行なのだと心に決めていた似而非インテリのグループとの闘いを有利なものにする為には、ワルターの此の二人の作曲家に対する理解力が大きい力と成ったのであった。此の二人の熱烈な支持者ではない人でも、ワルターの努力は認める事だろう。何故ならば、マーラーとブルックナーの数多い作品の中には、少くとも二曲や三曲は、忘れ去られるべきではない傑作があるからである。イギリスでは、マーラーの「大地の歌」は或程度知られてはいるけれども、数曲あるユニークな交響曲は殆ど聞かれていない。同様に、主情的であると云う「許し難い罪を犯した」ブルックナーの作品中〃まし〃な作品は、極くたまにではあるけれども、BBCの誰かが良心のか責を感じた時だけ、此の国では聴く事が出来るのである。

ブルーノ・ワルターは華美な指揮者ではない。彼は、人生の第一の使命は人を娯しませる事だという考えを持った新聞社の音楽批評家連中の為に、ステージの上で「戦勝踊り」にふける事などはしない。多くの指揮者達が両方の手を使って作り出す以上に、彼は眼と顔の表情のみで引出す事が出来るのである。どんなに控え目であろうとも、指揮者の人格は、必ず彼の演奏の中ににじみ出て来るものであると、彼は信じている。「全ての音楽の演奏には、自我のにおいがするし、またそうであるべきである。また、若しも其の自我が複雑で、波瀾に富んだ生涯が自我に深い傷跡を残した場合、完全に楽譜に忠実な演奏をしてみても、解釈する者の性格の特色はにじみ出て来るものである。」と、彼は自叙伝の中で明言している。

彼自身の演奏の中に私達が感じる「自我」は、洗練され、詩的で、めい想的、そうして、また常に最高に誠実なのである。

コヴェント・ガーデン王立歌劇場に於けるワルターの活動（II）

コヴェント・ガーデンで、ワルターが上演したR・シュトラウスの楽劇に就いては、会報第三号で詳しくお知らせしましたが、R・シュトラウス以外の作品の上演に関する資料が入りましたので、お知らせ致します。（資料提供者・協会会員 [redacted] 吉氏）

一九一〇・三・一　エセル・スミス　歌劇「難船掠奪者」

出演者は、ウォーカー、ブッカー、クービッキー、ワイデマン。此の上演は、イギリスに於ける初演でした。一九〇九年三月に、第一幕への前奏曲を、同年十一月に第二幕への前奏曲を紹介したワルターは、満を持して、翌年三月に全曲を上演したものと見えます。

一九三〇・五・一四　J・シュトラウス　喜歌劇「こうもり」

出演者は、ロッテ・レーマン、エリザベート・シューマン、マリア・オルツェフスカ、ヴェーレ、イェルケン、ゲルハルト・ヒュッシュ、ハビッヒ。

何と云う素晴らしいメンバーでしょう!!　一九三〇年代は、戦争前夜の慌しさと、暗雲、悲劇への前奏曲に包まれた忌わしい時期でしたが、芸術的には素晴しい時期でもありました。私達に親しい芸術家の全盛・黄金時代でもあったのです。

チャイコフスキー交響曲 第六番ロ短調「悲愴」

ワルター指揮ベルリン国立歌劇場管絃楽団（一九二四）
（ドイツ・ポリドール　六九七七一一五）

菅　一

ワルターが録音した旧吹込レコードは数多いが、大曲と言えば、チャイコフスキーの「悲愴」交響曲のみである。然し、正直に言ってワルターが「悲愴」を振るなどと云う事は、実際に此のレコードを手にする迄は信じられなかった。ワルターには体質的には向かない曲であり、ワルターが此の曲を演奏する事はないだろうと考えて居たからである。ワルターのチャイコフスキー。而も「悲愴」のレコードが存在したとは!!　彼の自伝「主題と変奏」を読むと、歌劇「スペードの女王」と「イフィゲニ・オニェギン」をしばしば演奏したらしいし、またアメリカCBS放送で、ホロヴィッツとP協奏

曲第一番を演奏した事もあったけれども、此のレコード以外に、ワルターがチャイコフスキーの楽曲を演奏したものは無い（ベルリン・フィルと協演による此の曲の第二楽章の旧吹込レコードは別として）。「悲愴」と言う曲は、ポピュラー・クラシックの代名詞の様なもので、此の様に俗化した曲を、ワルターが演奏して居たと云う事は、正しく驚異である。然し、彼の解釈と演奏は流石に芸術的であり、決して卑俗なものではなかった事は、真に幸いな事であった。「これでもか、これでもか」と云う押しつけがましさや、皮相的なセンティメンタリズムは皆無である。実に情緒纏綿とした、ロマンティックであり乍ら、それが上品なリリシズムに裏付けられている。其のロマン性に最も似通っているのは、メンゲルベルクの解釈であろう。然し、それよりももっと心にしみじみと滲通って来る何物かを持った演奏である。また、此のレコード程、此の曲が上品に演奏されたレコードは、フィリップ・ゴーベール盤以外には見られない。但し、ゴーベール盤は、良く言えば古典的であるが（ゴーベールの手にかかると此の曲が、あたかもハイドンの交響曲の一つであるかの様に聞こえて来る。）悪く言えば、非情で冷徹、ひややかな感触がある。当時のワルターの演奏には、若々しさと覇気がほの見えるばかりか、それと同時に、ハンス・ブフイッナーとも共通した纏綿たる情緒性も濃い。全体的に見て、テンポは中庸を得た適切なものである。リズムは深い。ハーモニーも優秀なオーケストラであるだけに、旧吹込の貧しい録音であるにも不拘、厚みが感じられる。旋律も真に良く唱っている。

第一楽章冒頭のファゴットによって奏されるテーマには物々しさが無い。ワルターは「鬼面人を驚かす」という事をしない。心に滲みわたる唱い方を以て、此のテーマを演奏する。第二主題も、哀切さはあっても優麗である。展開部に入っても、激烈な流れの中に、所々に思わずはっとする様な美しさがある。テンポをぐっと落して、一瞬「間」の美しさを聴かせたかと思うと、すうっと元のテンポに戻るという、後年のワルターの演奏によく見られる特長さえ、此の若い頃（四十九才）の演奏に発見出来る事は嬉しい。

第二楽章は、ドイツ風な舞曲に聞える。果敢なくわびしい美しさが、のびのびとした旋律と共に、あちらこちらに感じられる。

第三楽章は、荘麗な美しさがあって忘れる事は出来ない。光と影の交錯が美しいのである。

第四楽章は、苦悶とどうこくの美しさはあっても、何時迄も泥沼の中を這いずり廻って、もがき苦しんでは居ない。音楽的な昇華の美しさが、聴者の心を打つのである。

一八八六年生れのフランスの音楽学者、マルク・パンシェルルはこう述べた事がある。「解釈というのは、或るレヴェルの達成という事に於いて『創造』であると考える。其の意味で、ブルーノ・ワルターは解釈者であった。ブルーノ・ワルターは、無限の尊敬を以て作品を演奏し、全ての可能な表現を優しさと希望との連続とにしたのであった。」と。

ワルターは、チャイコフスキーのスラブ的な『憂鬱』にはまり込んで、それに溺れこんで了う事をして居ない。深い憂愁の底に落ち込んでも、常に眼を上方に向け、あこがれと夢と幻想を以て、心は天空へと舞上る。人生への恐怖、苦悩、不安、焦燥、絶望、敗滅に何時迄も、打ちひしがれたままになって居る事は無いのである。天使の翼に依って、栄光の天国へと引上げられるのである。まさに、「昇華の美」が此のレコードの特長なのである。

結局、ワルターの「悲愴」は、スラヴの「悲愴」ではなくて、あくまでもゲルマンの「悲愴」なのである。スラブの泥臭さ、非洗練性の代りに、「ゲミュートリッヒカイト」があるのである。

ブリティッシュSOに就いて

音　一

戦前のコロンビア・レコードの総目録を開いてみると、ブリティッシュ交響楽団（又は英国交響楽団）という団体のレコードが相当数認められます。指揮者としては、ブルーノ・ワルター、フェリックス・ワインガルトナー、ヘンリー・J・ウッドの名が挙げられています。戦前は勿論、戦後に至る長い間、此のブリティッシュSOは、既成、実在の団体だと考えられていました。当時、ロンドンへ旅行し、またはロンドンに滞在する音楽家や音楽愛好家は、相当多かった筈ですが、オーケストラに対してよりも、声楽家や独奏器楽奏者に興味と関心が向けられていた為に、オーケストラの細い事情に関しては、詳細な情報が送られて来る事は無かったのでした。

然し、最近になってから（と言っても十年位以前ですが）、私は此の団体は既成のものではなく、ロンドンのイギリス・コロンビアがレコード録音の為に、臨時に編成したピック・アップ・オーケストラではなかったかと思い始めたのです。其の理由は、戦後、ロンドンの音楽界の事情が少しづつ分る様になり、BBCやLPOやLSOやハルレ管弦楽団の戦中戦後の情報が入って来だした時に、BSOに関しては、何の情報も無かったし、毎月数えきれない程の多種多様なLPレコードが、生産、発売されているにも不拘、国内盤のみならず外国盤にもBSOの名が見当らなかったからです。また私が入手したワルターのモーツアルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の一九三一年版のレコードは、ドイツ・コロムビア盤ですが、日英のコロンビア・レコードのレコードにはブリティッシュSOと印刷されているのに、ドイツ盤には単に「大交響楽団」と記されている事が、其の疑いを深めたのです。

其処へ、イギリスの諸管弦楽団の活動に関する資料が入って来たのです。それによると、ブリティッシュ交響楽団という名前を名乗った団体が存在した事は、確かにありました。然し、それは私達が考えているBSOではなくて、全然別個の団体です。其のBSOは一九一九年にレイモンド・ローズという人に依って設立されたオーケストラで、其のメンバーは第一次世界大戦に将兵として参加した人達ばかりであったのです。不幸にして、此の団体は質的に一級のものとは言えず、二シーズンか三シーズンで解散して了いました。

然し、一九二一年の六月には、イギリス人の作曲家の作品を、然るべき陽の当る場所に置こうと云う目的を以て、A・イーグルフィールド・ハル博士に依って一九一七年に創立された「英国音楽協会」が主催した音楽祭に於いて、エイドリアン・ボールト、ユージーン・グーセンス、ハミルトン・ハーティ、ワルター・ダムロッシュの指揮の下に、コンサートを二回開いて、英米作曲家の諸作品の演奏をした事もありました。

それでは、私達に親しいBSOの正体は一体何だったのでしょうか？　最近、私は此の問題の解決に導くヒントをもたらした資料を発見しました。それに依って、一九三一—一九三二年のシーズンが終った時（一九三二年五月頃）に、ロイアル・フィルがスポンサーであるロイアル・フィルハーモニック協会の財政難の為に解散した事と、同一九三二年五月に、トーマス・ビーチャム卿が、ロンドン・フィルの創立に着手し、同年十月七日に処女公演を行ったと云う二

つの出来事が確認されたのです。其処へまた、二つの情報が入りました。其の一つは協会会員[redacted]氏から提供されたものです。それに依れば、シゲティ、ワルター、BSOの協演によるベートーヴェンのV協奏曲のレコードの録音が、一九三二年四月から五月にかけて行われたと云うのです。もう一つの情報は、其のレコードが日本と英国のコロンビアのレーベルでは「BSO」と記されているけれども、オーストラリア・コロムビアでは、ロイアル・フィルと記されていると云う情報だったのです。一九三二年五月と云えば、ロイアル・フィルの解散時と合致しますし、そのレコードと其の直後に録音されたヘンリー・J・ウッド卿指揮のピース物（バッハ、グレンジャーの作品）を最後として、BSOの名を冠したレコードがパッタリと出なくなった事も事実なのです。

また、BSOのレコードが出て来る直前に、ロイアル・フィルの名を冠したレコードが忽然と出なくなって了ったのです。其処に、時期的に一致するものが多いのです。

是等の資料を総合すると、BSOはロイアル・フィルの別名、或いは、ロイアル・フィルのメンバーを中心とした録音用の臨時編成オーケストラであったと言える様に思われます。然し、それで疑問が氷解した訳ではありません。ロイアル・フィルの名を使って録音したレコードは沢山あるのです。或る一時代、何もわざわざ変名を使わなければならない理由は無かった様にも思われますが、①フルメンバーではなかった（小又は中編成）。②前記の様に、ロイアル・フィルのメンバーを中心とした録音用の臨時編成。③ロイアル・フィル協会の管弦楽団としての公式の活動としてではなく、RPOの非公式活動であった。と言う理由も考えられない訳ではありません。

従って、左記の様な仮説を立てて見ました。一〇〇%メンバーが一致していた訳ではないという事実は、多少あったでしょうが、メンバーがダブっている事は間違いないと思われるので、此の様な系統づけが出来るのではないでしょうか。？

ロイアル・フィル（一九二九・三迄）→交響楽団（一九二九）→
ロイアル・フィル（一九三〇・三―四）→交響楽団（一九三〇）→
BSO（一九三〇―一九三二）→LPO（一九三二）→

此処に現われた「交響楽団」とは、一九二九及一九三〇年録音のワルター及ウッド卿のレコードに使用された、是亦ロンドンの録音用臨時編成オーケストラです。（また別の資料によると、その当時のロンドンに存在した幾つかの管弦楽団の楽員は相当ダブっていて別なオケを聴きに行っても、見なれた顔の奏者に逢う事が珍しくなかったそうです。）

ロンドン・フィルの創立に当って、ビーチャム卿は、「老巧」に「新鮮味」を注入する意味合いから、経験に富んだ楽員を相当数採用したと同時に、相当数の若い優秀な楽員も採用したという事実も判明しました。其の年配者達が、旧ロイアル・フィルの楽員であった事は想像に難くありませんが、それ迄のLSOやRPOの演奏に比較して、LPOの演奏には若々しさと新鮮さが認められると云う当時の定評にも符合します。

話がやや横道にそれますが、LPOを創立した時のビーチャム卿は、オーケストラのスポンサーは、恒常的なコンサート・マネージメントとメージャー・レコード会社であるべきだと云う考えと、演奏会や録音には、スポンサーは常に其の専属オーケストラを使用すべきだという考えを持っていたので、英国放送協会（BBC）に話

を持ちかけましたが、BBCは中立的立場を固執し、また以前からBBC・SOの設立を考えていたので、此の話は成立しませんでした。けれども、其の他の種々のコンサート・マネージメントの協力を得る事には成功し、レコード会社に関しては、HMV及び英国コロンビアと手を結びました。

さて、右に立てた仮説に対して、それの裏付けとなる資料、又はそれをくつがえす詳細な資料をお持ちの会員諸兄がおいでになりましたら、何卒御意見なり、御異見をお寄せ下さい。

参考文献

①ロバート・エルキン「クィーンズ・ホール、一八九三―一九四一」（ロンドン、ライダー社）
②ロバート・エルキン「ロイアル・フィルハーモニック」（ロンドン、ライダー社）

※　※　※　※　※

ロイアル・フィルハーモニー（これ以前は省略）

一九二九・三　WAX四八〇八―一五　ワインガルトナー
　　メンデルスゾーン　「スコットランド」交響曲

交　響　楽　団

一九二九・（五？）　WAX四九二八―三三　ワルター
　　「バラの騎士」「維納の森の物語」「ジプシー男爵」
　　ロイアル・フィルハーモニー

一九三〇・三→四　WAX五四八五―九二、五四九八―九
　　ベートーヴェン　「ハンマークラフィア」　ワインガルトナー

一九三〇・四　WAX五五〇〇、五五〇二　ワインガルトナー
　　ヨーゼフ・シュトラウス「天体の音楽」

交　響　楽　団

一九三〇　WAX五五八四―九　ワルター
　　「ジーグフリートの牧歌」「マイスタージンガー」
一九三〇　WAX五六一七―二〇　ウッド
　　バッハ　ブランデンブルク協奏曲　第六番

ブリティッシュ交響楽団

一九三〇　WAX五八三六―九　オスカー・フリート
　　ドリーブ　舞踊組曲「シルヴィア」
一九三一・四　WAX六〇四六―五一　ワインガルトナー
　　「玩具交響曲」「千一夜物語」「春の声」
　　（中略）
一九三二・四―五　CAX六三八八―九七　ワルター
　　ベートーヴェン　V協奏曲（シゲティ）
一九三二・五　CAX六三九八
　　ワーグナー「名歌手」徒弟達の踊りと名歌手の入場
一九三二　CAX六四三九―四四
　　バッハ　ブランデンブルク協奏曲　第三番他及び
　　グレンジャー　「岸辺のモリー」

ロンドン・フィルハーモニー

一九三二　CAX六五六六―九　ウッド

フランク　交響変奏曲　（ギーゼキング）
一九三二　ＣＡＸ六五七〇―三
リスト　Ｐ協奏曲　第一番　（ギーゼキング）
一九三三・一　ＣＡＸ六六三六、六六三八　ピーチャム
ヘンデル　「意匠の起源」
一九三三・一―二　ＣＡＸ六六八二―九　ワインガルトナー
ベートーヴェン　交響曲　第五番　ハ短調
（此の資料を提供して下さったのは、協会会員川合四朗氏です。）

「珠玲仁雅」

☆武蔵野市立図書館では、二十世紀三大指揮者演奏シリーズの最終回として、三月二十五日午後二時から、ブルーノ・ワルター特集レコード・コンサートを行いました。曲目は左記の通り。

① ブラームス　大学祝典序曲（コロンビアＳＯ）
② シューベルト　交響曲第八番「未完成」（ＮＹフィル）
③ ベートーヴェン　交響曲第六番「田園」（コロンビアＳＯ）

☆

☆京都府宇治市に御在住の会員、[redacted]氏はお勤め先の音楽鑑賞部主催のレコード・コンサートで、私達の協会が刊行した、ハイドンの軍隊交響曲（ワルター、ウィーン・フィル、ＢＷＳ一〇〇二）を御紹介なさいました。

☆此の度、ワルターのイギリスに於ける活躍に関する資料をいくつか入手しましたが、何れも不完全なもので、会報の本文中に、独立した記事として掲載する事が出来ませんので、不完全ながら、まとめて此の欄に掲載しておきます。若し、此の記録に関して、もっと詳細な資料をお持ちの会員諸兄がおいでになりましたら、何卒御教示下さい。其の際には、完全な記録として、あらためて本文中に掲載し直したいと思います。

(イ)一九〇八年に、ロイアル・フィル協会は、ＲＰＯの全シーズンの演奏を一人の指揮者に委せる制度を廃し、異った指揮者が、夫々の演奏会を担当するという制度を採用しました。其の結果、ワルターもその一人として選ばれたのです。また、会報第四号でお知らせした様に、一九〇九年三月にワルターが出演する事になったのでした。（これが、ワルターの初めての訪英でした。）ワルターの外に選ばれた指揮者達の中に、ニキッシュ、シュヴィアール、エルガーのみならず、メンゲルベルク、アルバート・コーツ、ランドン・ロナルド、トマス・ビーチャム等、私達に親しい人々の名前が見られます。

(ロ)会報第三号でお知らせした、コートールド＝サージェント・コンサートに於けるワルターの活躍に就いて、左記の二つの資料があります。

(a)一九二九―三〇年のシーズンで、ロンドン・シンフォニーを指揮して、マーラーの「大地の歌」（歌手名不明）を演奏しました。此の一連のコンサートは、初期には一シーズンに就き、六回の演奏会を開きました。此のシーズンでは、第一番目が一〇月二二日に開かれ、ワルターが指揮した演奏会は、其の中第三番目でした。（従って一九二九年の末か、一九三〇年の初めに行われたと考えられます。）

(b)一九三〇―三一年のシーズンの第六番目（恐らく一九三一年の春）に、ワルターはＬＳＯを指揮して、マーラーの第二交響曲を、

ルイーズ・ヘレッツグルーバーとエニード・スザントと協演しました。二人共、ウィーン国立歌劇場の歌手で、此の中ヘレッツグルーバーは、ベートーヴェンの「第九」のワインガルトナー・ＶＰＯ盤で、ソプラノを唱って居る人です。

(ハ)一九三一―二年、一九三三―四年、一九三八―九年（一九三九年一月）の三シーズン、ワルターはＢＢＣ・ＳＯの演奏会に出場しました。どのシーズンだか不明ですが、ワルターがピアニストとして協奏曲（曲目不明）を弾いたという記録があります。

(ニ)「ロンドン音楽祭」と云う祝祭が、ＢＢＣによって復興したのは一九三三年でした。其の復活後、第二回目の一九三四年の音楽祭で、合計六回にわたる演奏会を、ワルターとボールトが三回づつ受持ちました。ＢＢＣが主催したのですから、恐らくオケはＢＢＣ・ＳＯと想像されます。また、此の演奏会が、前項の演奏会と一致するのか、また別のものであったかに就いては不明です。ワルターが受持った三回の演奏会の中、最も関心が持たれたのは、その二番目で、曲目は、

ブルックナー　交響曲　第九番　ニ短調
同　「テ・デウム」
モーツァルト　Ｐ協奏曲　ニ短調　Ｋ４６６

余程ワルターは、Ｋ４６６の協奏曲が好きであり、得意であったと云う事が判るだけでも興味のある資料です。また、ＨＭＶに、ワルターがブラームスの第四交響曲、モーツァルトの交響曲第39番、ベートーヴェンの「フィデリオ」序曲を録音したのが、一九三四・五・二一ですから、此の一連の演奏会も、大体其の頃行なわれたのではないかと想像されます。

(ホ)「ロンドン音楽祭」として史上空前絶後の規模となったのは、一九三九年の祭典でした。此の祭典は、四月二十三日（日）から、五月二十八日（日）迄、挙行されましたが、其の二日目の四月二十四日に、ワルターはＬＳＯを指揮して、メンデルスゾーン、モーツァルト、ブラームスの曲を演奏しました。残念な事には曲目は不明です。（尚、ＨＭＶに遺したシューマンの第四交響曲の録音が、此の頃に行われたのかどうかの確認は、私達の将来の宿題です。）

(ヘ)ワルターは、ＶＰＯを指揮する様になってから、此のオケを率いてイギリスに楽旅したと云う事は聞いていましたが、今迄に判明したところでは、少くとも三回は行った様です。其の第一回目は一九三四年、第二回目は翌一九三五年（ワインガルトナー滞同）、第三回目は一九三七年で、此の時にはブルックナーの第八交響曲を演奏しましたし、また滞同したエリザベート・シューマンがドイツ・リートを唱って居ます。但し、曲目はおろか、ＶＰＯの伴奏だったのか、ワルターのピアノ伴奏だったのかも不明です。

(ト)面白いのは、ウィーン・シンフォニー（ウィーン・フィルに非ず）を率いて、一九三六年に訪英している事です。記録に依れば、オズワルド・カバスタ滞同と記されている為に、その際に演奏された曲目の中、たった一曲だけ判明しているブルックナーの第七交響曲が、ワルターの演奏に依るものであったかどうかが不明になるのですが、曲目から考えれば、また、其の弦の美しさは「永遠の喜び」であると評された事を考えれば、ワルターの指揮だったと想像して良いのではないでしょうか。？

☆　次号会報の内容を豊富にし、またレヴェルを高める為に、会員諸兄の玉稿を掲載したいと思います。ワルターの芸術に関する評論等、ワルターに関することなら何でも結構です。御投稿下さい。